

ナイロビでの現地国際理解教育・体験学習の実践

前ナイロビ日本人学校 教諭

北海道稚内市立宗谷中学校 教諭 高橋 充

キーワード：職場体験学習、国際理解教育、ボランティア学習、現地理解、ナイロビ

1. はじめに

赤道直下、アフリカの東に位置するケニアは、アフリカの中でも高い経済成長率を誇り、人々が生き生きと暮らす国である。そのケニアの首都ナイロビにある日本人学校での3年間の実践は、今まで味わうことのできなかった、貴重な経験となった。ナイロビでの生活は私たち日本人にとって、文化的に違和感を感じることが多いが、逆に、異文化を理解する教材の宝庫でもあった。「ケニアだからこそ」「ナイロビにいるからこそ」できることを考え、そこでの体験学習を通じて、児童生徒たちに異文化を学んでほしいと、多くの見聞を広げたり、体験活動を取り入れたプログラムを企画した。

2. 職場体験学習

ナイロビ日本人学校では、中学部を受け持つこととなり、各年度で「ナイロビだからこそできること」をテーマとした職場体験学習を実施した。

(1) Nyumbani Children's home での実践

初年度は、私が担当していた家庭科のカリキュラムに関連づけて、保育実習を職場体験学習として実施することを決め、その事業先をNyumbani Children's homeに決めた。その施設は、HIV（Human Immunodeficiency Virus：以下HIVと略す）孤児院であり、子どもたち全員がHIVに感染しており、親の事情で施設に預けられている。なお、事前学習において、アレンジしていただいた現地日本人スタッフの方からこの孤児院について学ぶ機会を設け、ケニアにおけるHIV事情やHIVについての基本知識を学ばせた。

そこでの活動は、

- ①園内清掃と昼食準備～実習が始まる前に与えられた仕事で、2つのグループに分かれ、園内を清掃する班と、園児の昼食で出される豆を分類する班に分かれて活動した。
- ②保育実習～自分たちで考えて、計画を立てて活動した。遊び道具なども自分たちで作成し、園児と交流した。事前に作成した段ボールハウスや、新聞紙で作成した野球道具などを持参してふれあい活動を行った。
- ③施設内の子ども部屋の清掃、靴洗い～グループに分かれ、子どもたちが生活している部屋の清掃と、子どもたちが使っている靴の清掃を行った。活動では時間が余り、子どもたちとのボール遊びなどの時間に充てた。

実習当日は、それぞれの生徒たちが意欲的に活動した結果、園児たちがいつも以上に喜んでいただいていたようだった。特に、孤児院の先生は、日本人学校生徒たちの積極的なふれあい活動の結果、今まで笑顔すら見せなかった子が、元気な姿で中学生と一緒に遊んでいたことに、感激したようであった。この取り組みの後、施設の方々から、もう一度来て欲しいとの要請もあり、お互いにとって意義のあった取り組みであった。

(2) KWS (Kenya Wild Service：以下KWSと略す) での実践

次年度は、動物と関わる体験学習の企画を立てた。ケニアにいるとサファリなどで、動物を見る機会が多々あるが、そこで働く人たちがどんな仕事をしているのかを知るだけでなく、動物にふれてみる機会を設けたいと思い、KWSに職場体験学習をお願いした。KWS内には動物孤児院があり、そこは病気をもった動物や親と離れてしまった動物を保護する施設である。ここでの活動も、前年と同じように、現地日本人スタッフをお願いして、事前学習を手伝ってもらい、職場実習に取り組んだ。また、KWSではそこで働く海外青年協力隊の方にも協力していただき、職場体験だけでなく、生徒たちにこの職業に関する話をしていただいた。

そこでの活動は、

- ①園内清掃～この施設は一般客も訪れる施設で、広い園内を何回かに分けて落ち葉集めなどの清掃活動を行った。仕事の合間では、動物にふれあう機会も設けられ、日本では滅多に味わえない体験もした。
- ②海外青年協力隊の方との交流～昼食後に、各自が質問を用意し、協力隊の方が答える形式で実施した。
- ③動物たちへの餌やり～この活動の前に、動物孤児とのふれあいの場が設けられ、障がいをもったキリンへのミルクを与える活動などができた。また、ライオン・チーターなどの肉食動物に餌を与える活動は、日本では絶対に経験できない機会でもあり、貴重な時間を過ごすことができた。

この活動では、コミュニケーションを苦手とする生徒が、動物孤児と接していくうちに、表情が明るくなったり、また、英語が苦手な生徒も、意欲的かつ率先して作業に取り組み、現地職員からも大きな評価を得ていた。この実習を終えた後は、どの生徒も達成感に満ちた表情で、後輩児童からもこの活動についてうらやましがられていた。また、職業観のみならず、動物孤児に対する愛護精神の意識付けにもなり、今後の生活に何らかの影響を与えてくれる活動になった。



講話をするダヤシライオンへの餌やり活動

(3) Uchimi Super marketでの実践

最終年度は、日本でも行われているような職場体験学習を考え企画した。さまざまな職種がある中、流通（小売り）に焦点をあててみた。ただ、この年度は生徒数も増え、1事業所では人数が多いため、2カ所に分かれた。この学習を実施するにあたって、事前学習で、現地日本人スタッフにお願いして、働くにあたっての心構えやケニアの職場事情を生徒たちに教えた。

当日は、スーパー全般の仕事をお願いし、レジ打ち、レジ補助、品だし、店内清掃、検品、棚清掃、青果選別、ベーカリー手伝いなど、各担当者の指示の下、実習に取り組んだ。この実習ではケニア人店員の下での活動であったため、英語を話さなければならない状況であったが、私を含めた日本人の補助を入れないで、自分たちで聞いて、率先して活動に臨むといった形態をとった。この試みは、事業者側にとっても初めてであり、活動中にレジで励まされる生徒や、顧客の中には初めて見る光景に、‘Wonderful experience’ と賞賛してくれた人もいた。

普段利用している施設を裏側から見ることができた今回の学習は、最初は、乗り気でなかった生徒も、働いていくうちに「労働」の意義を学べたようだった。生徒たちからの感想にも、働くことの大切さやありがたさを感じていたようで、後日、保護者からもこの取り組みを評価していただいた声をもらった。

3. ボランティア学習

(1) Anajari schoolでの実践

2年次の3学期にキベラスラム近く Anajari Schoolへボランティア学習を企画した。自分の思いとしては、テーマである「ナイロビに住んでいるからこそできること」を生徒たちに体験させたかった。ナイロビには世界最大のスラム街であるキベラがある。ただし、キベラスラムは治安上、絶対に立ち入ってはいけない地区である。しかし、その様子を映像などでは見る機会があるにせよ、そこで暮らす同世代の生徒はどのような環境で学んでいるのかを、実際に目にして感じて欲しいと思った。実習にあたって、警備員の同行させるなどの安全面を十分に配慮した。また、活動ではボランティアだけでなく、交流という面も考えながら取り組んだ。

Anajari schoolはキベラスラム近くに隣接する地区にある私立の学校である。下見時に、説明を聞いたが、限られた予算の中での運営ではあるが、ここの学校の先生方はそのような条件下でも教育熱心であることも伝えられた。この学校の多くの生徒はキベラより通っており、生活が苦しく、学費をまかなうのも厳しい家庭が多いのも

事実であった。この学校は脇道に位置しており、通学路もケニア特有の未舗装のガタガタ道で狭く、日本での光景とは大きくかけ離れた環境下にあった。

この学校は幼稚部から8年生まで学年1クラス40名ほどであるが、教室は狭く、また設備も十分ではなかった。教室の大きさは日本人学校の教室の半分程度で、机は古い長机を再利用したものと思われる。建物はトタンで床は土であった。敷地も狭く、活動場所が限られていた。また、教科書は1冊を4～5人で共有していた。なお、8年生の生徒たちが受けている全国統一学力テストでは、500点満点中400点以上を取る生徒が半数以上を占めるが、残念ながら奨学金を受けて上級学校に進めるのは極少数で、自分たちの家計の問題から進学を断念せざるを得ないのが現状であった。今回の活動も現地日本人スタッフに事前学習より協力してもらった。

そこでの活動は、

- ①図書室整理～コンテナを再利用した図書室で、支援品として寄贈された本を整理していく作業を行った。狭い図書室での作業なので、6名以下で活動。埃などを取りながら、項目ごとに並べていった。
- ②授業補助、授業講師～図書室整理と並行して、ペアで1年生から4年生までのどこかの教室に行って、授業アシスタントもしくは、先生として授業を行う活動を行った。主に、算数、社会、理科の授業で黒板の前に立って活動を行い、教える立場を初めて経験した。普段、おとなしい生徒も小学生の算数を親身になって手伝っていた。また、意欲的な生徒たちは、率先して日本のことを教えるなどの活動をした。ある授業では、その先生方からも任せられていたようで、自分たち自身の英語を交えながら、1時間という授業をやり切った。
- ③ソーラン交流～午後の時間は日本人学校生徒による南中ソーランを披露した後に、Anajari schoolの子どもたちと一緒に踊った。完成度としてはまだまだの踊りであったが、限られたスペースで精一杯踊った。その姿勢に全校児童生徒が大きな関心を寄せ、2度目は全校で踊り、3度目は自分たちの世代の生徒たちと一緒に踊った。

この取り組みが大好評であって、多くの児童生徒がまた、踊りたいとの希望の声が最後に聞かれた。

今回のボランティア学習は、ケニアにいながらにして、その実態を知ることが困難だった学校でのボランティア学習をすることができた。自分たちの学校と比較して、身近に私たちは違う環境で学校に通う子どもたちと接することができ、いい経験になった。物の見方や価値観が今までと変わったり、子どもたちの前で話すなどの活動が自信につながったようであった。



南中ソーランでの交流

(2) Feed the childrenでの実践

3年次の3学期にナイロビの町外れにあるFeed the childrenへ保育実習も兼ねてボランティア学を企画した。この意図として、乳児にふれあえることと、障がいについても学べるという点で取り組んだ。

この施設はイタリアの人たちが設立し、現在はオーストラリアの人たちがサポートしている施設である。ここで暮らす子どもたちは、生まれながらにして、親に見捨てられた子どもや、肢体不自由・精神的な障がいを持つ子どもたちで、彼らの通う小学校も隣接してある。施設は近代的なもので、ケニア人の寮母さんが働いている。中には義足を必要とする子や、障がいの度合いで学校にも通えない子もいた。

そこでの活動も、現地日本人スタッフとともに事前学習を行い、以下の内容を当日行った。

- ①乳児ケア…新生児～2歳児くらいまでの子どもたちを、屋外で抱っこしながらふれあう活動をした。寮母さんに抱っこの仕方を教わりながら、ケアをしていた。最初は用心しながらふれあっていたものの、慣れると同時にいい表情で取り組んでいた。
- ②幼児ケア…2歳児～5歳児くらいの幼児を自作のおもちゃを用いたり、屋外でおんぶや抱っこをしながら、ふ

れあい活動を行っていた。当初は手先を鍛えるためにも、折り紙を用意していたのだが、子どもたちが生徒たちと屋外での遊びを大変喜んでいたので、臨機応変に対応し、終始、子どもたちと遊んでいた。

- ③洗濯室補助…この活動は、特に手伝って欲しいと施設から要望された。各棟のシーツやタオルの洗濯など、比較的体力のいる仕事に取り組んだ。シーツやタオルの量などそこで働く人たちの大変さを体験できたと同時に、各棟の掃除に携わる中、その施設で暮らす子どもたちの様子を知りうることができた。特に、部屋で義足を見たときや、車いすでの生活を余儀なくされている子どもたちの様子を知ることができた。
- ④フィーディング…乳児組と幼児組に分かれて、昼食の補助を行った。特に、乳児組はミルクを飲ませたり、離乳食を食べさせることにトライするなど、なかなか経験のできない活動を行った。また、幼児組も食べさせることに集中させようと、それぞれが工夫してフィーディングを行っていた。この頃になると、幼児たちはすっかり慣れており、親しく生徒たちとふれあっていた。
- ⑤支援品の仕分け…当初は、折り紙を寮母さんに教えるという活動を用意してあったのだが、乳幼児が全員寝てしまい、その面倒を見なければならないということで中止になった。その結果、支援で送られてきた衣服をサイズごとに仕分けをする活動を行った。

今回の保育実習は、乳幼児に接する機会を学ぶほか、障がいについて学ぶきっかけとなることも意図していた。生徒たちが、子育てを実体験することで、自分たちの親の大変さを知ることになったと感じた。普段の生活で冷ややかな一面を見せていた生徒も、乳児とふれあうことによって、いつもとは違う和やかな表情を見ることもできた。この活動を通して、あらためて生命に対する畏敬の念をもてるようになったと感じた。

4. おわりに

これらの活動を通して、生徒たちの別の一面を見ることができた。普段とは違う表情で、思いやりの気持ちや優しさ、笑顔などが随所で見られたり、経験したことのない場面での緊張を味わえたことで、以後の学校生活での様子が変わった。たくましくなった表情が見られたり、言動にしても相手の気持ちを考えられるようになった発言が見られた。また、物や人に対する価値観が変わってきたのも感じとれた。また、ここで生まれ育った生徒たちも、普段、何気に暮らしている街に、どんな施設があり、どんな人が活動しているのかを学ぶことによって、ここに暮らしている人たちへの見方も変わってきた。

現地理解・国際理解教育では、こちらから積極的に働きかけていかないと、生徒たちの心に響かないことがわかった。教師自身も興味をもって、取り組んでいかないと、生徒への関心や意欲も起きてこない。ナイロビは、日本の生活では考えられないような光景を見ることもできる生きた教材がたくさんある場所で、その実態を学ばせることが、私自身や生徒たちへの財産になると思った。また、これらの活動を通して、実際目で見、耳で聞いて、口で会話するといった活動が生徒たちの心を揺さぶる結果となりうることを感じた。私自身、今まで日本最北の地、稚内市で暮らしてきたので、他所に対しての生活や習慣に興味があった。だからこそ、ナイロビで生活していて、何か教材になり得るものに出会ったり、聞いたりしたら、現地日本人スタッフに相談し、それが教育活動としてなり得るかどうか話し合ってきた。そして、計画段階より活動案を一緒に考えてもらい、より教育効果を高めるために、現地で暮らす視点で事前指導をいただいた。また、活動時は同行してもらいながら、子どもたちの様子を交流した。いずれの活動においても生徒たちの表情が笑顔であったのが、教育効果を実感するところであった。この担当を任されてから、生徒たちの心に響く現地理解・国際理解教育について考えたが、これらの活動を通して、多くの見聞を広めたことで、生徒たちの心が豊かになったと感じた。だからこそ、このような取り組みを、後押ししてくれた現地日本人スタッフに感謝している。

最後に、この活動を経験した生徒たちには、今後の生活や将来の生き方を考えていくにあたって、この貴重な経験を自分たちの財産として役立ててほしいと願っている。また、機会があれば、自分たちが目や耳で感じたケニアの現状を自分たちの口で伝えて欲しいと思う。私自身も、可能な限り、今後の教育活動においてナイロビでの実践を役立てていきたい。